雜錄

心理的前定に就いて

務臺理作

Witasek, Grundlinien der Psychologie, 1908.
Höfler, Grundlehren der Psychologie, 3 Aufl. 1918.

マイノング學派及びこれに准ずる人々は其源をアリストテレスに發しブレンターノがこれを近代心理學に結合して意識作用の特色を指示的對象に對する關係に求め表象・判斷・情意の三作用に區分する思想を繼承してゐる點では全く同一である。マイノングは表象と判斷との中間に假定（Annahme）と稱する作用を考へ、それを以て他の心的作用に歸入する能はざる特殊のものとするのであるが、マルチーの如きはかゝる作用を特殊のものとすることに反對し、それの一部分は表象に他部分は判斷に歸入すべきものと主張してゐる（Marty Über Annahmen, Zeitschrift f. d. Psychologie, Bd. 40）。かく意識現象は表象判斷及情意の三作用に大別出來るのであるが更に對象に對する客觀的・主觀的關係に由つてこれを見れば、Geistesleben, Gemütsleben と二分することも出來る（Höfler, Witasek）。前者は直接對象を指示してこれを意識に支持するものであるが、後者は夫れ自ら獨立して對象に向けらるゝことがない。後者の本質をなすものは指示的對象を自ら把捉するものでなく、寧ろかく向けらるゝ主觀の態度を意識に表現するものである。それ故に後者が一の獨立的複合

體として意識に現はるゝためには、かくして對象に向けられるためにはそれの前定（Voraussetzung）として對象を意識に支持する樣な知的作用の存在を俟たねばならない。換言すれば情意作用は知的作用と具體的に結合して甫めて獨立せる意識作用となり得るのである（Meinong, Über Gegenstandstheorie S. 2; Über Annahmen, 2 Auf, S. 145, 166.）。かく複合的なる情意作用成立のために必然的に前定せねばならぬものを――知的作用のすべてをかゝるものとしてマイノング及びヘフラーは感情の「心理的前定」（Psychologische Voraussetzung）と呼んでゐる。此派の人々は一般に感情の本質的なるものを快及び不快の對立以外に認めざる故に、感情の本質的區別は快感・不快感の外にはないわけである。而して事實吾等の感情と稱するものはかゝる本質的要素とそれの前定としての種々なる知的作用との結合より成る具體的複合體なるを以て種々なる感情の區別は壹ら心理的前定としての知的作用の特色に由らねばならない。此點が此派の人々をして感情の分類を知的要素の特色に求めしむる所以である。かくして感情を如何に分類するのであるか、及びそれに關する二三の問題に就き先づヴィタセクの著書に由つて概說しやうと思ふ。

一

ヴィタセクの Grundlinien der Psychologie は一般論と各論の二編に別たれ一般論に於ては心理學の對象、心的物的二現象の區別及關係、心的現象の本質心理學の方法等を論じ各論は Geistesleben, Gemüts leben の二部に別ち前者に於ては表象、判斷及假定後者に於ては感情、意欲を主として分析的記述的に取扱つてゐる。然し余は上述の如くヴィタセクが知識と感情意欲とを如何に結合せんとす

るかの點のみに就いて述べたいと思ふのである。

表象に於ては表象作用(Vorstellungsakt)判斷に於ては證認要素(Überzeugungsmoment)が夫々の本質となる如く感情に於て夫の本質と認むべきものは何であるか。ヴィタセクはそれを次の二點に求めてゐる。

第一　表象內容は表象作用と結合するとに由つて甫めて意識に現はれる、同樣に感情作用も常に或る內容と結合し夫に由つて對象へ向けられるのである。吾々が喜びを感ずると云へば必ず「何事」かに就いての喜びであり悲しむことと云へば必ず「何事」かに就いての悲しみである。かゝる「何事」かはブレンターノの所謂指示的對象に外ならない但し感情の場合に於てはその內容は表象作用が內容に對する關係とは全然別の關係にある。表象內容の表象作用に對する關係は非自立的である。赤色は只視作用のみと關係する、視作用を離れて「內容」赤は夫れ自ら存在するとは出來ないからである。表象內容が內容として存在するためには必ず表象作用と結合せねばならない。これに反して感情內容の感情作用に對する關係は自立的である。如何なる感情內容も或る感情作用と必然的に結合せねばならないと云ふことはないからである。一の花は悲哀の對象ともなればまた歡喜の對象ともなる。或は逆に一の感情作用は表象作用の如く或る內容の支持者となることがないからである。感情內容と表象內容とは同一であるが、しかも表象作用と感情作用に對する關係は上の如くに相異すること、そこに感情作用を表象思惟の作用より區別する處の本質的特色がある。凡て意識に於て吾等の持つ內容は表象內容であるか或は思惟內容であり凡て對象に就いて吾等の知る處の者は表象對象であるか或は思惟對象であるかである。只表象・思惟のみが直接對象へ向けられる。感情が對象へ向け

られるのは間接的で只直接對象を把捉する樣な知的作用を介してのみ甫めて對象と關係すると云ふと、表象が客觀的であるに對して感情は純粹に主觀的と考へらるゝのもこれ故である。卽ち感情は必ず何等かの知的作用あつてこれと結合することを許さねばならない。ヴィタセクはこれを感情前定（Gefühlsvoraussetzung）と呼んでゐる。

第二　感情の他の特色はそれの多樣性を分析することに由つて見出さるゝ快・不快の對立である。如何に復雜なる感情と雖もこの本質的特色を缺くものはない。感情の性質は唯この快、不快の對立のみで其他の區別は二者の孰れかと結合する知的要素の綜合的特色（高次の對象）及びそれの强度的時間的經過の特色に外ならない。例へばヴントの考へる興奮と沈靜の如きは綜合的感情進行の强度的時間的特色に歸することが出來、緊張と弛緩の如きは意志的要素の共働の結果に外ならない。

かく感情をして他の作用と區別せしむる特色は主觀的であること及び快・不快の對立を持つことであるが、これに基いて感情を分類することは意味をなさない。何となれば快・不快は抽象せられたる感情の本質であり、それに由ればすべての感情は快感・不快感の二種のみに歸すべきであるからである。（Witasek, Zur Psycholo logischen Analyse der ästhetischen Einfühlung, Zeitschrift f. d, Psychologie, 25, 1901, S. 33.）。然るに實際に吾等の感情と呼ぶところのものは前定としての知的作用を中に含める一の複合體である。例へば色に就いて快感を持つと云へば色はこの快感の對象であり、又何ものかを失ふて悲しむと云へば喪失は悲哀の對象である。それ故に正しき意識狀態に於ては無對象的感情（objektloseGefühle）と稱する如きものゝ存在は許されない。かくして如何なる感情も必然的に、缺く可からざるものとして知的作用を前

定するものとすれば、感情前定の特色が具體的なる感情複合體の種類を定むべく、從つて感情の種々なる區分は感情前定の特色に由るべきである。

感情前定の機能は二樣である。

(1) 感情が向けらるゝ處の對象を感情作用に支持する所の作用。

(2) それは同時に感情の部分原因となる。例へば「適意」と云ふ感情は溫暖に向けられるのみならず溫度覺に由りて惹起せらるるからである。前定はかゝる機能を持つ故にこれを變化すれば感情複合體も必ず變化する。而して前定の種類はヴィタセクに由れば表象・思惟の二種であり思惟は更に判斷及び假定に別たるゝを以て結局それと結合する感情の種類は表象感情判斷感情及假定感情の三別となるのである。

一、表象感情(Vorstellungsgefühle)

此處に表象と稱するものは感覺並に Produzier te Vorstellung, と呼ぶもの、知覺表象並に再生表象・純粹想像表象を指す。これ等はすべて純粹感情要素と結合して夫々の表象象情を形成するのである。而して又表象は作用と內容とに別たるゝ故にこれ等を二別して表的作用感情(Vorstellungsaktgefühle)と表象內容感情(Vorstellungsinhaltsgefühle)となる。前者は例へば苦き味覺に伴ふ不快溫湯より受くる快感、余りに强き光覺に伴ふ不快、齒痛の如きものであり、後者は美くしき裝飾或は旋律より受くる快感の如きである。前者は作用と結合する感情なるを以て作用の變化即ち感覺作用より再生表象作用へ移ることに由つて消失する。吾等は記憶に由つて純粹なる感能的苦痛をば感能的快感と同じく如何に微量たりとも「實感」として惹起することはない。これに反して後者は例へば美しき旋律に於ての如く內容の再生表象に於ても同樣に實快感に涵ることが出來る。ヴィタセ

クは前者を感能的感情(Sinnliche Gefühle)後者を美的感情(ästhetische Gefühle)とも呼んでゐる。

此處に注意すべきは感能的感情に於て知的なるものが一方に、情的なるもの(Emotionales)が他方に對立するのでなく、全體が感覺の一種——情覺(Gefühlsempfindung)として考ふべきであると云ふ見地のあることである(例へばスッッンプの如く)。然しながらヴィタセクに由れば最も區別し難き痛覺に於ても感覺的要素と情的要素とが區別出來、後者は前者に特有なる客觀性を缺いて居ると云ふのである。

二、判斷感情(Urteilsgefühle)

藝術品を蒐集する人の感情は藝術品其者に對する美的感情の外に猶それを所持すると云ふ判斷に基く特有なる感情を含んでゐる。かゝる感情を判斷感情と呼ぶ(同樣にMinong, Über Urteilsgefühle, was sie sind und was sie nicht sind, Archiv f. d. ge.

psychologie, Bd 6. 1905. S. 22ff.)。表象感情の對象が單なるObjektであるに比しこの場合は明かにObjektiv「余はかゝる物を所持すること」である。判斷感情に於てもまた表象感情に於ての如く判斷の作用と內容に由つて別たれる。好奇の情の如きは內容よりは寧ろ知らんとする作用そのものより生ずる故にこれを判斷作用感情(Urteilsaktgefühle)と云ふ可くObjektivの內容そのものに卽して生ずるすべての感情例へば「余は兄弟の健康に復したるを喜ぶ」と云ふ如き類はObjektivの變化に由りて變化すべき者なるを以て判斷內容感情(Urteilsinhaltsgefühle)と呼ぶべきである。後者に屬するものはObjektivの性質に基いてFreude, aktuelle Trauer, Kummer, Mitleid, Neid, Geiz, Frucht, Hoffnung, Zufriedenheit, Ärger, Wertschätzung の如く區別せられる。ライプングは Psychologisch-ethischen Untersuchungen zur Werttheo

rie, Graz, 1894 於て作用に由るものを Wissensgefühle 内容に由るものを Wertgefühle と呼んだ。價値感情と呼ばるゝ所以は、そは對象及び事實の價値を吾等に示現し吾等をして其の上に價値付けしむるからである。即ち何ものかに價値あると云ふのはそれの存在に關する證認に於て快感を持つことである。Wissensgefühl をば論理的感情と呼び價値感情を倫理的感情と呼ぶ場合もある。

三、假定感情(Annahmegefühle)

假定(アンナーメ)に對する場合は實在ならざる全くの假象(シャイン)に向つてである。吾等が詩を讀んで感激する時吾等は詩の內容をば事實として認むるのでなく、即ち事實として「判斷する」のでなく只想像に於て假想するのである。從て詩に對する吾等の思惟作用は判斷に非ずして假定である。不幸續きに惱める人は彼の想像に於て幸福になりし場合を描き出しそれに於て玉ゆらの喜びや滿足を感ずるのである。またやがて來べき或は到底現實に求め得られざる狀態に自らを須臾く置いて見るもの何等かの希求を持つものはかく考へることに由つて單なる假定より解發せられ「假定されたる」對象に向けられた或る感情を體驗する。かゝるものが即ち假定感情である。

假定感情は判斷感情と同樣なる Freude, Kummer, Mitleid 等を持つが Wissensgefühl と同樣なものを持つことがない。何となれば判斷と假定との區別は心的「作用」の區別であるが假定作用は判斷作用の有する「證認」を缺く故に前者の如く特有なる作用感情(Aktgefühle)を惹起するの力を缺いて居るからである。即ち假定感情は假定內容感情である。

假定感情は假象に向けられると云へばそれの快

或は不快は實感（Wirkliches Gefühl）としての快でも不快でもないと云ふことになる。然しこれは逆理に見える。假定悲哀（アンナイト・ラウエル）を體驗するものは實感としての悲哀と同樣なものを體驗する、然しこれを實際的（ernstlich）に悲哀として體驗するのではない。快感の場合も同樣である。彼は一つの感情を「想像」に於て體驗するも或は「實際」に於て體驗するもひとしくこれを實感として體驗するのである。只二者の相異する所は、ひとしく快不快であるとは云へ前者は後者の實際的であること即ち實際感情（Ernstgefühl）であるに對しそれを（實際性を）缺除してゐる點即ち想像感情（Phantsiegefühl）と稱すべき點に存する。約言すればヴィワタセクに由れば、假定感情は假定（アンナーメ）と結合せるがために、全くそのことのために實感ならざる他の感情となるのでなく、夫れの全體が實際感情又は判斷感情に對して想像感情として區別せられると云ふのである。實際感情と想像感情の相異は一方は判斷を一方は假定を前定として持つと云ふこと、即ち假定と判斷と區別せらるゝ點は後者の持つ信憑（Glauben）證認を前者が缺除するために假定は判斷よりも可動的であり任意的であると云ふより以上の相異ではないのである。二者は感情本質の區別ではなくて何處までも感情前定の相異であり。感情本質は常に實感であると見るのである。これに關してマイノングと見解を異にすることは次節に述ぶる如くである。

感情の分析に附帶してヴィタセクが意欲の作用を如何に取扱ふかを述べんに具體的なる感情と同樣に具體的なる意欲は複合せる心的事實である。表象が他のすべての心的複合體に與かる如くこれにも與かることは勿論である。然し表象は意欲の目的を示すことが出來ない、意欲せられるものは單なるObjektではなくて常にObjektivであるから

である。余が何ものかを欲求すると云ふのは、「余が何ものかを所持すること」を欲求するのである。Objekliv は判斷によるか或は假定に由つて把捉せられるのであるが、この場合の客觀的(オブゼクティーフ)は欲求に向つて己に實現せられたる事實ではなく單に「假定的に」支持せられてゐるものであるから、これを把捉するものは假定でなければならぬ。換言すれば如何なる意欲に於ても假定が存し、それに由つて意欲對象卽ち目的が支持せられる。而して若し此目的が到達せらるゝ時は假定は同一對象に就いての判斷に移行すると云ふ。(同一の思想は 1902. マイノングの Uber Annahmen 初版に存するものである。)

假定と意欲との關係は二樣である。

(1) 目的の把捉作用として、

(2) 更には想像感情殊に想像快感(Phantasiela stgefühle,)の前定として。

意欲せらるゝもの卽ち意欲の目的となるものは先づ思惟されねばならぬ、而してそはまた快感を惹起する者でなければならぬ。然しこの快感は元來を云へば假想的なるもの、卽ちWirklichesを對象として持つことなきものなる故に實際感情に非ずして想像感情である。この想像感情は、普通の場合には目的が到達せられ假定が判斷に移行すると同時に、相應する實際感情及び滿足の感目的到達の快感となるのである。明かに想像に於て期待せられたる快感が意欲の充たされたる後に於て實際的に解發せられない場合があるが、そは實現せられたる事實が意欲に假想せられたるところのものと十分合致しない場合であるか、或は感情傾向が實現せられたる者に對して實際は全く異るものを要求して居た場合或は意欲に含れたる想像感情に由つて感情傾向が己に活動力を喪失してゐた場合かである。又意欲に於て想像感情の與かるは普

通であるが然し時としては實際感情特に不快感の與かる場合がある。不快感は主として現在の狀態から惹起されるからである。例へば窓外よりの喧噪に不快を感じて戸を閉ぢんと欲する如きである。表象。假定。それを前定とする想像感情及び不快感これ等は合して所謂意欲の「動機」を作る。

已に述べたる如く判斷の本質をなす者は肯定否定の對立、感情の本質をなすものは快不快の對立であるが意欲に於てそれに相當する要素は何であるか。意欲は單なる表象や感情要素の複合體ではない、それ等に現はれざりし特有なる中核が意欲をして意欲たらしめるのである。卽ち性質的特性としてVerlangen とVerabscheuen, Wollen Nichtwollen, Streben Widerstreben の對立がある。孰れに於ても判斷の肯定否定の場合の如く主觀の能動的態度が示される。Nichtwollen, Widerstreben は決して對象の消失に對する單なる努力或は意欲作用の單なる缺乏を意味するものではないからである。

マイノングとヴィネセクの間に想像感情の本質に就いて及びそれと關聯し美的感情の本質に關して見地の相異がある。

マイノングは1902に其心理學的主著"Über Annahmen"を出し表象と判斷との中間にありて前二者に歸入すべからざる新なる作用として假定(アンナーメ)を認むると共に實際(Ernst)に對する想像(Phantasie)の範圍を擴張して實際に於ける表象。判斷。情意に對し想像の範圍に於ても前者に歸入すべからざる想像表象(Phantasie-vorstellung)想像判斷(Phantasieurteil)想像感情(Ph.—gefühl)及び想像意欲(Ph.—begehrung)の存することを認めてゐる。想像判斷とは卽ち假定(アンナーメ)である。かく意識の

全體的特色として實際と想像とを對立せしめ後者を以て前者に歸入すべからざるものとすれば當然想像感情は實際感情と單に前定の相異に由るのみならず本質的に區別されねばならない。ヴィタセクはこれに對して其著 Grundzüge der allgemeinen Aesthetik, 1904 に於て想像感情と實際感情との區別は感情の本質に存せずして感情前定の特性に外ならぬことを主張し更に心理學に於ても同一の意見を持すること前節に見る如くである。これに對しマイノングは更に 1910, Über Annahmen の二版に於て詳細に此問題を論究して第一版に於けると同じく想像感情が全く新なる感情なることを主張し且ヴィタセクの所謂美的感情を以て表象感情と見ることに反對し同感情は假定感情であることを述べてゐる。

要するにヴィタセクの想像感情に對する根本的の考はそれを以て假定感情と同一のものと見ることであるが、マイノングは「想像」を以て「實際」に對應して而かも新なるものと考ふる以上想像感情の中に實際感情に於ての如く單に假定感情のみならず表象感情。判斷感情をも含めやうとしてゐる。彼はヴィタセクが想像感情は假定感情に外ならず逆に假定感情は想像感情に外ならずといふを(Witasek, Grundzüge der allge. Aesthetik, S. 113—119) 次の二點より論評してゐる。

第一想像感情は必ずしも假定感情に非ること。

若し過去の心的事實を想起することを廣義で想像體驗とよぶならば過去の感情の想起はやがて現實の想像感情となる。若しこの感情が齒痛と云ふ如き感能感情(表象感情)である場合、これを想起に於て體驗する想像感情は假定感情であるとは云はれない。同樣なことは價値感情(判斷感情)に就いても云はれる。友人の死に就いて過ぎし日の悲哀を想起する時は想像感情を持つが、それは友

人の死に關する判斷を少しも疑ふのではない。此場合は明かに判斷感情が想像感情として體驗せられるのである。勿論想像感情の中假定感情は重要な部分を占めるのであるが猶其中には表象感情並に判斷感情が見出さるゝ故に想像感情を以て直ちに假定感情であると云ふのは當を得てゐない。

第二逆に假定感情は必ずしも想像感情にあらざること。

マイノングに由れば此點がヴィタセクの美學上の重要なる思想に反對するところのもので、卽ちヴィタセクは美的感情の對象は常に Objekt であると考へるのであるがマイノングは例へば美しき物語に對する吾等の態度に於て知らるゝ如く吾等に美的印象を與ふるものは明かに Objektiv である何となればそれは假定に由つて把捉せらるゝからである。この場合の美的感情は表象感情ならずして假定感情である。或はまた吾等が美しき裝飾や旋律によりて快感に涵る場合かゝる美感は實在する音或は色そのものに由るのでもなく、また其の實在に關する判斷に基くのでもなく、單にそれの Sosein に關する、從つて Objektiv に關する假定である。それ故に美感は專ら假定感情であらねばならぬ。而して美感は想像のみでなく實際に於いて體驗せらるゝに故に美感は實際感情にも屬する。卽ち想像感情は假定感情と交錯するのみならず、それより範圍の遙かに廣いものである(Über Annahmen 2 Aufl, S, 315—321)。マイノングに由れば感情は作用(アクト)に由れば表象感情・假定感情及判斷感情となるが內容より見れば Soseinsgefühle 卽ち美感 Seinsgefühle 卽ち價値感情(存在判斷に基く)とに別たれる。更に意識の完成(Vollkommenheit) より見る時は實際感情と想像感情に別たれ此二者に於て作用及內容に基く感情はすべて對應的に含まるゝのである。例へば判斷感情は實際

感情としては Seinsgefühl として美感 (Soseinsgefühl) たることなるも、想像の中に取入れらるゝ時は想像感情として美感ともなり得るのである。彼に由れば „Werthaltung" は想像に於て „Wertung" となるのである。

かゝゞタセクの如く感情と云はるゝ者はすゝて實感に外ならぬと見ることゝマイノングの如く實際感情卽ち實感と見てそれに對立する想像感情を考へることゝ、從て感情の種類は心理的前定の特色に基く外更に意識の Vollkommenheit に由つて別たるゝと見ることの主張は余に取て極めて興味深き問題である。が是に關する考察は他日試みることとして此處では此問題に關し二三參考となるもののみを擧げて置かうと思ふ。マイノングと共に想像感情の特異性を認むるものは

R, Saxinger, Uber die Natur der Phantasiegefühle und Phantaeibegehrungen in den Grazer Untersuchuugen zur Gegenstandsth. u Psychos S, 579 ff.

R, Saxinger, Beiträge zur Lehre von der emotionalen Phantasie, Zeitschr. f. Psycholngie, 40 S. 145 ff.

E, Schwarz, Uber Phantaslefühle, Archiv f systemat. Philosophie, 11, S. 481 ff.

ゞィタセクの如く反對するものとして

Th, Lipps, Fortsetzung der „psychol. Streitpunkt," Zeitschr. f, Psychologie, 31.

Marty, Uber Annahmen, Zeitrchr. f. Psychol, 40 S. 25 ff.

W. M. Urban, Valuation, its nature and laws 1909 p. 133—141.

三

クラーの Grundlehren der Psychologie は初

版が其者 Psychlogie と共に 1897 に出た、前者は後者を講義用のために若干簡單にしたものである。それ故にヘフラーの思想を十分知るためには後者に據らねばならぬこと勿論である。此書は 1890 出版の Grundlehren der Logik と合本になつてゐる。1918 合冊第四版は其內容が初版と異つてゐない。ヘフラーの心理學は其組立つ主要部分に於て全くヴィタセクと同じものである、ヴィタセクが恐らくヘフラーの著書に負ふのであらう。前述の問題に關してヘフラーが感情を如何に分類するかと云ふことを述べて見やう。

ヘフラーに由れば感情は快・不快の二種にのみ限らるべきもので其他の性質的區別は夫に與かる知的要素の區別に外ならないと見ること、從つて感情の分類に就いてはヴィタセクと殆ど同一と云つてもよい。夫に卽して及び夫に由つて吾等が快・不快を持つ樣な心的現象を（內容のみに關して）彼はマイノングと同じく心理的前定と呼ぶ。（マイノングが初めて此言葉を用ひたのは Psychologisch-ethischen Untersuchungen zur Werthesrie 1894 である）。彼に由れば如何なる感情も必ず心理的前定を持たねばならない、從つて „objektlose" Gefühle と云ふ如きものは嚴密な意味で存在しないと云ふのである。

かゝる心理的前定の特色に由つて感情を別つことはヴィタセクと同樣であるが只彼の如く假定感情の存在を認めてゐない。但し彼は其他著 Psychologie に於ては 1979 已に「假定（アンナーメ）」なる語を使用し意欲の動機に假定の與かることを明かにしてゐるが此書に於ては假定なる作用を示す言葉を全く用ひてゐない。彼はまたヴィタセークと同じく美的感情を以て表象感情に屬すべきものとしてゐる。例へば音の調和色の對比は美感を惹起するものであるが、それを把捉する作用は判斷でなくて

表象である。何故に判斷でないかと云へば吾等が畫を見て美しいと感ずるのは畫そのものを或は其の現はす對象を意欲することでもなく或はまた現はされたる事物或は出來事が果して實在するや否やを判斷するのでもなくて單にかくかくと表象するのみであるからである。マイノングは上述の如くこれを以て判斷にも表象にもあらざる假定と考へる。この關係に就いては興味ある問題を構成すると思ふ。

彼はまた判斷感情に屬する價値感情の一種として Gefühlsgefühle, Begehrungsgefühle の如きものを擧げてゐるが、恰かも判斷感情が判斷と結合し夫に由つて惹起せらるゝ如く前者は先行する或る感情に基いて生ずる感情であり後者は例へば吾等の努力に伴ひ、目的實現の程度に隨つて體驗せらるる如き感情である。孰れに於ても理論的に考ふれば或る感情或は努力の存在を Wissen することと

卽ち一種の存在判斷に伴ふ感情故に價値感情と見るのである。ヴィタセクの言葉で云へば意欲の動機に含まるゝ感情は想像感情（假定感情）であるが目的實現に伴ふ感情はかゝる意味の價値感情である。かく考へ來る時は所謂 Wissensgefühle もまた一種の價値感情と見らるゝことになるわけである。マイノングは 1894 Psychologisch-ethischen Untersuchungen zur Werttheorie に於ては Wissensgefühle, Wertgefühle を別異のものとしてゐたが 1905 Über Urteilsgefühle, was sie sind und was sie nicht sind, §4; に於ては明かに Wissensgefühle に就いても „mein Wissen existiert" と判斷せられてゐる故に價値感情であると云つてゐる。ヴィタセクも美學に於てこれを認め且本來の價値感情と區別するために Wissenswertgefühle と呼んでゐる。（Aesthetik, S. 225）

以上は單にヴィタセクと相異する點のみを主と

して擧げたのみであるが他は殆ど同一と見て良いやうである。此二人に就いて紹介せし處は其心理學中の一部分に屬するに過ぎないが、然し此等の思想は彼等の、同時に墺太利學派の心理學の中核をなすべき重要なる思想であらうと思ふ。（完）